

## ドイツ表現舞踊のジャポニズム

山口庸子（名古屋大学）

### 1. はじめに

20世紀初頭から1930年代にかけて渡欧した日本人舞踊家たちが、しばしば日本的な題材を用いて舞踊公演をおこなっていたことは、近年の研究で次第に明らかになってきている（片岡：2015, 國吉：2002 など）。また、来日したハラルト・クロイツベルクなどの舞踊家が、日本の伝統芸能に関心を示していたこともすでに報告されている（Kuniyoshi:1997 など）。特に、ドイツ表現舞踊の代表的舞踊家であるメアリー・ヴィグマンに関しては、彼女が使用した仮面に能の影響があることは早くから知られており（Wigman: 1963）、オリエンタリズムやジェンダーの問題と関連づけて論じられているものの（Manning: 2006 など）、ヴィグマンの創作全体とジャポニズムとの関連は不明である。総じて、モダニズムの演劇や美術・工芸など他分野と比較して、ドイツ表現舞踊におけるジャポニズムの問題は、今なお十分に論じられているとは言い難い。

本発表では、ヴィグマンの弟子で、これまでほとんど論じられたことのない女性舞踊家ヴィ・マギトの日本風仮面舞踊（1926）を取り上げ、関連文献およびアーカイヴ資料の検討を通して、表現舞踊における日本文化受容の一例を示したい。

### 2. 歴史的背景

表現舞踊では、仮面が様々な形で用いられた。その一つの背景として、モダニズム芸術における仮面の復権という現象が考えられる（山口：2019 など）。ドレスデンの表現主義の画家グループ『ブリュッケ』に属したことがあり、ヴィグマンと親交のあったエミール・ノルデが、能面など非西洋の仮面を収集していたこともわかっている。ヴィ・マギトの夫であり、ドレスデンを拠点に活動した彫刻家ヴィクトル・マギトが、能面の影響を受けつつヴィグマンの『魔女の踊り II』などの仮面を製作しているのも、このような歴史的文脈を抜きにしては考えられないだろう。ヴィクトルの妻であり、ドレスデンのヴィグマン校で教えていたヴィ・マギトも、日本舞踊や歌舞伎の題材に基づき、日本風の仮面や衣装を用いた舞踊を創作している。ヴィグマンが、ヴィ・マギトの公演を鑑賞していることは、これらの日本風舞踊に対するヴィグマン自身の関心を示唆している。

### 3. ヴィ・マギトの日本風仮面舞踊

ヴィ・マギトは、日本風の仮面を用いた複数の舞踊作品を創作していたと思われる。そのうち、

1926年5月にドレスデンで上演された舞踊公演『ダンスー仮面ーパントマイム：日本の能に倣って』には、パンフレットや新聞記事が残されており、公演の概要を知ることができる。

この公演は、三つの小規模な作品から構成されている。最初の舞踊は三人の踊り手による舞踊で、酔った男が、別の男と一人の娘を舞踊の陶酔の中に巻き込んでいくという筋書きである。二番目の舞踊は、『京人形』の筋をなぞっている。残された写真から、二人の女性の踊り手が、日本風の仮面と衣装をつけて、男性の彫師と女性の人形の役を演じている様子がわかる。三番目の舞踊は、歌舞伎『道中五十三駅』に取材したものと思われる。化け猫退治がテーマである。

能や歌舞伎の受容では、男性が女性を演じることがしばしば強調されるが、ここでは、逆に女性が男性を演じている。また、これらの作品にインスピレーションを与えたのが、訪日したドイツ人の日本見聞記であると思われる点も興味深い。新聞批評などを見ると、旅行記や学術書のほか、写真や映像など複数のメディアが、舞踊におけるジャポニズムのリソースとなっていた様子が読み取れる。本発表が扱うのは、その一例に過ぎないが、日本側からの発信だけではなく、ドイツ語圏の舞踊家の言説や舞台実践に関しても調査を進めていくことで、表現舞踊のジャポニズム、および日独文化交流の新たな側面が見えてくるのではなかろうか。

### 4. 参考文献（抜粋）

Mary Wigman, *Die Sprache des Tanzes*, Stuttgart: Battenberg, 1963.

Kazuko Kuniyoshi, “Kreutzbergs Japan-Tournee“, Frank-Manuel Peter (ed.), *Der Tänzer Harald Kreutzberg*, Berlin: Hentrich, 1997, pp. 159-169.

國吉和子『夢の衣装・記憶の壺—舞踊とモダニズム』、新書館、2002年。

Susan Manning, *Ecstasy and the Demon: The Dances of Mary Wigman*, University of Minnesota Press, 2006.

片岡康子監修『日本の現代舞踊のパイオニア』、新国立劇場情報センター、2015年。

山口庸子「エドワード・ゴードン・クレイグの仮面論と能の受容」、『表象』13号、2019年、150-163頁。

### 5. 付記

本研究は、「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる言説と表象の研究」（科研・基盤B：19H01244、代表：西岡あかね）の成果の一部である。